

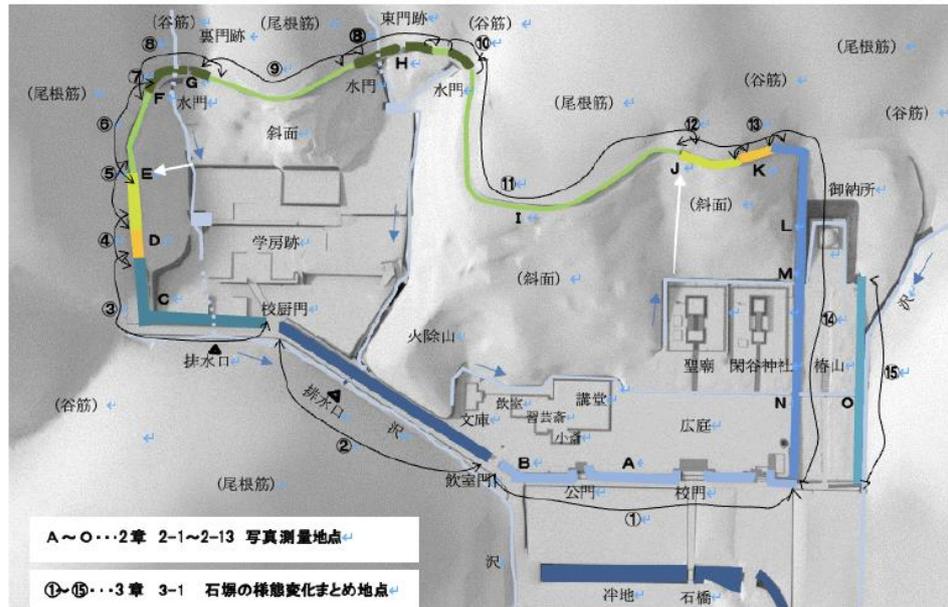
## 2023年度 独創的研究助成費 実績報告書

2024年3月29日

報告者	学科名	建築学科	職名	教授	氏名	向山 徹
研究課題	閑谷学校の歴史的・文化的価値に関する研究5—水利遺構および校地造成の調査と考察—					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	向山徹	デザイン学部建築学科・教授	建築設計・意匠	統括・調査・意匠的考察	
	分担者	河田智成	広島工業大学・教授	建築史	歴史的考察	
研究実績の概要	<p>今年度は、昨年度に引き続き、閑谷学校の水利遺構の写真測量による調査と3Dモデリングによる可視化し・考察を行った。日本建築学会中国支部研究報告集に投稿・口頭発表を行った。査読論文（日本建築学会計画系論文）が再査読になり再度投稿したが不採択となり現在も執筆中。</p> <p>【研究結果の概要】</p> <p>1. 閑谷学校の石堀については、既往の研究によって、その部分的な構造、蒲鉾型石堀・石垣・石垣型石堀という様態の存在とその大まかな位置が示されてきた。本稿では、現地の実測調査・写真測量からのモデリングによる可視化を行い、石堀の様態の詳細とその変化を明らかにした。結論は第3章に詳述したように、次の4点に整理できた。</p> <p>2. 蒲鉾型石堀・石堀・石垣全体の様態は、3種類にとどまるものではなく、3種類の様態を媒介するものなど、多様な様態が存在する。</p> <p>3. 蒲鉾型石堀・石垣・石垣型石堀は、図16においては⑤、⑧の東西両端の2カ所、⑨の東西両端の2カ所、⑩の東西両端の2カ所、⑫で工法の受け渡しが行われており、ここで蒲鉾型石堀から石垣へ、石垣から石垣型石堀へ、石垣型石堀から石垣へと、場所と地形の変化によって交互に様態変化している。</p> <p>4. 蒲鉾型石堀は、岩盤に基礎を置いた造成工事と一体になって施設を囲い込むように、石垣型石堀・石垣は、尾根・谷に対応しながら地形に沿って、ほぼ様な高さを保つように校地全体を囲っている。</p> <p>5. 石堀様態変化の特異点が、「学びの場」の中核領域を示唆している。</p> <p>全体として、蒲鉾型石堀の素材と工法が漸次的に変化し、自然の領域に近づくに従って、精巧な造形から素朴でプリミティブな造形へと変化する様態変化は、人為的な造成による諸施設の領域と、地形に沿う最小限の境界を形成する自然地形の領域とを緩やかに繋ぎ、東西の施設配置（聖廟および学房）にも符号するものでもあった。閑谷学校の環境を整える石積みの技術は、閑谷における「学びの場」形成の契機でもあったと言える</p>					

※ 次ページに続く

研究実績  
の概要



成果資料目録

- 向山徹、河田智成「閑谷学校の石塀について 2—閑谷学校の環境技術に関する研究 6—」日本建築学会中国支部研究報告集 第47 巻 925 令和 6 年3 月
- 向山徹、河田智成「閑谷学校における場所形成契機としての環境技術に関する研究 (その1) —石塀の様態と場所の呼応について— 日本建築学会計画系査読論文 (不採択)